

特集 1. 音環境の基礎概念

第 1 回 初めに—なぜ音響の専門家が必要なのか**

平成 21 年 1 月 9 日

□ 建築家の音響設計

建築家、建築士などの一般的な設計技術者には、絶対に音響設計を任せてはいけません。

彼らの音響設計は一言でいえばデタラメなのです。著者も住宅設計業界での実務経験がありますが、その経験からしてもこのことは断言できるのです。

- ・所属 著者は当時、建築学会賞の受賞歴のある著名な設計事務所に所属
- ・施工 日本でも指折りの工務店が施工を担当
- ・建て主 資本力のある建て主が中心

特に私は上記のような恵まれた環境で働いていました。しかし、こうした環境でも、ほぼ 100% 建築家が独断で音響設計もどきをしていたため、その音環境の質はひどいものばかりだったのです。

□ なぜ音響設計ができないのか

なぜ建築家や建築士は音響設計ができないのでしょうか。様々な要因が考えられますが、主な要因は非常に単純なものです。

それは、音響工学が建築学が別のもので扱われ、それぞれが別々の学部・学科で扱われている点にあるのです。そのため、学生は建築学を学んだだけでは、音響工学をマスターすることができないのです。要するに、**学問、技術が縦割り化している**のです。

□ やっぱり建築家に依頼してしまう

こうした背景にもかかわらず、日本では音響設計の専門家が家づくりに関わることは滅多にありません。

さらに実際の家づくりでは、多くの人が「よい音環境を実現したい」と思いながら、「誰に相談したら良いか分からない」、「これ以上の工事費はアップはできない」という板ばさみに遭います。

** 初めて記事をご覧になる方は、必ず「[利用規約](#)」をご確認ください

そうした中で、「本来は専門家に依頼すべきで、専門家でないとまともな音響設計はできない」と薄々気付きながら、「経験豊富な建築家であれば、ちゃんとした音響設計をしてくれるはず」、「一級建築士さんだから大丈夫」という風に解釈している人が多いのではないのでしょうか。

□ 音響設計と認知的不協和

そうすれば、板ばさみからくる不安やストレスを一時的に解消することができるのです。こうした一連の流れは、まさしく認知的不協和[†]に陥ったヒトが行いやすい発想なのです。

□ セカンドチャンスはない

ヒトとして不安を直視したくないの当然のことです。しかし、音環境のデザインは、最もやり直しがききにくい分野なのです。これとは対照的に、例えば、温熱環境のデザインでは、仮にその建築的な工夫がデタラメだったとしても、冷暖房設備の計画さえしっかりしていれば、ヒトはそこで問題なく暮らすことができます。

ところが、音響設計では騒音問題を簡単に解決する設備、音響障害を取り除く機械設備など存在しないのです。だからこそ、当所の計画段階で、音響コンサルタントなどの専門家を意見を聞くことが重要なのです。

□ 失敗事例を取り上げる

さらに、日本ではほとんどの人が一生に一度しか家づくりを行いません。そう考えると、なおさら音環境デザインの失敗は許されないのです。

とはいえ、建築家、建築士による音環境のデザインがデタラメであるとは、にわかには信じにくいと思います。そこで、以降の記事では、あえて住宅設計者に近い視点[‡]で、建築家、建築士が犯しやすい失敗事例を取り上げてみることにします。そうすることで、家づくりに専門技術を導入することが、いかに重要かをお伝えしたいと思います。

[次回「吸音」と「音の吸収」とでは意味が違うへ](#)

* 記事の感想をお聞かせください [アンケート画面へ](#)

[†] 詳しくは分野 1. 特集 1. 最終回「[認知的不協和と家づくり](#)」を参照。

[‡] 音響実務者の視点で書かれた書物しか出回っていないからです。

【寄付歓迎】当コラムは無料ですが、ご寄付は歓迎します。詳しくは[ご支援依頼](#)をご覧ください。